



令和2年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

# 見沼のほとり

第 10 号  
令和3年1月7日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

夢は…

校長 富田 敦

明けましておめでとうございます。

旧年中は、本校の教育活動にご支援、ご協力を賜り誠にありがとうございました。本年も生徒一人ひとりの成長のために教職員一同、全力で取り組んでまいります。変わらぬお力添えをお願いいたします。

新型コロナウイルス感染拡大防止の対応により、私たちの非日常は「新しい生活様式」と名前を変えて、日常となりました。校内ではこれまで同様「毎朝の手指消毒や校内の消毒、定期的な換気と換気扇による常時の機械換気、手洗い指導、ソーシャルディスタンスを保つこと、マスクの着用指導」を徹底します。

「夢は箱根を走ることです」本校の卒業生で現在埼玉栄高校陸上部3年生の 三角 隼人 選手が土呂中に来て話してくれました。三角選手は、12月に京都の都大路を駆け抜けた第71回全国高等学校駅伝競走大会で第4区を区間6位という好成績で走ったばかりです。三角選手は選手として初めて走った都大路を「すごく楽しかった」と言います。土呂中の3年生の時、さいたま市駅伝競走大会で第1区を任され、区間1位の好走で土呂中を第7位、県大会出場に導きました。「全国高校駅伝に出たい」という思いで埼玉栄高校に進み、練習に励みました。2年生になり、調子もよく、目標に向けて前進していた矢先、アクシデントに見舞われます。

「左右大腿骨の疲労骨折」と診断されました。ストレッチやアイシングなどのケアを怠ったためだと悔やみました。「早く治して練習に参加したい」という気持ちが焦りを生み、治りかけになったケガを再発させてしまいます。夢であった全国高校駅伝も走ることにはかなわず、サポートメンバーとして中継所で選手を支えました。「1年生の時は補欠としてエントリーされ、2年生になって5000mで自己ベストを出すなど、周囲から期待されていました。早く戻りたいとリハビリをしてきましたが、結局ほぼ1年間走れませんでした。本当に悩み、苦しく、悔しい思いの2年生でした。」

「初めての都大路はとても楽しかったです。レースの前日までは、京都に来ることができなかった部員30人の思いを背負っていました。しかし、レースではいつも『気負わず、考えすぎず、そのレースを楽しむ』と自分に言い聞かせています。夢だった全国高校駅伝のスタート位置に立った時も『楽しむだけだ』とレースに集中しました。」区間6位の好記録、2人を追い抜く快走でしたが、「抜いた」という実感はなかったそうです。埼玉栄高校は第13位でゴール、「絶対的なエースをケガで欠いて臨んだ大会だったのに、すごい」とチームの好成績を埼玉栄高校の監督もたたえています。三角選手の次の夢は「箱根駅伝を走ること」だそうです。土呂中の卒業生が箱根路を走る夢を実現することを私の夢とし、応援したいと思います。

さて、令和3年「今年の抱負」です。

「令和3年の抱負」を渡部 權 生徒会長に聞きました。「まず、毎週木曜日に生徒会本部で行っている『あいさつ運動』を契機として元気なあいさつを全校生徒ができるようにしていきたいと思います。そのために、自分自身が明るいあいさつを心がけます。また、『新しいことに挑戦したい』とも思っています。部活動の活性化を図れるような企画を考え、実行していきたいと思います。」

令和3年、土呂中生の新たな歴史が幕を開けます。



4区 三角選手(左)が5区の選手にたすきをつなぐ。

(埼玉新聞12月21日)掲載